

岩下桃子・菊水健史・永澤美保

研究の背景と目的

【背景】

- ・ドッグパークでは個人的なつながりを強化して最終的に近隣の住みやすさにつなげることができる (Whyte,1980)
- ・イヌが異なる特性や特徴を持つ他者との橋渡し役となり、地域社会の健全性を高める可能性がある (Graham and Glover,20)
- ・イヌの介在効果はイヌの飼育者同士の接続を促すが、非飼育者とは異なるネットワークにいる可能性がある

【目的】

イヌ飼育の有無によって地域社会との繋がりやその繋がりがwell-beingに与える影響に違いがあるのかを検討する

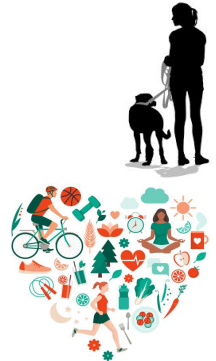
研究・調査方法

イヌの介入の有無による他者との関わりや利他的行動の変化のアンケート調査の解析データ

回答者数:377人(男性:128人 女性:249人 年齢層:19歳~88歳)

アンケート結果の内容

well-being 向社会性 地域交流 友人の数 友人に会う頻度
場所トモとの関わり 地域愛 最終学歴 世帯年収



well-being(ウェルビーイング)とは??

心身と社会的な健康を意味する概念 身体的・精神的・社会的に良好な状態

場所トモとは??

地域の店舗や公園、公共施設などで繰り返し顔を合わせ、互いに認識し会話を交わす関係

結果と考察

イヌ飼育の有無と他者との関わりに関する相関係数のヒートマップ

表1:イヌ飼育者

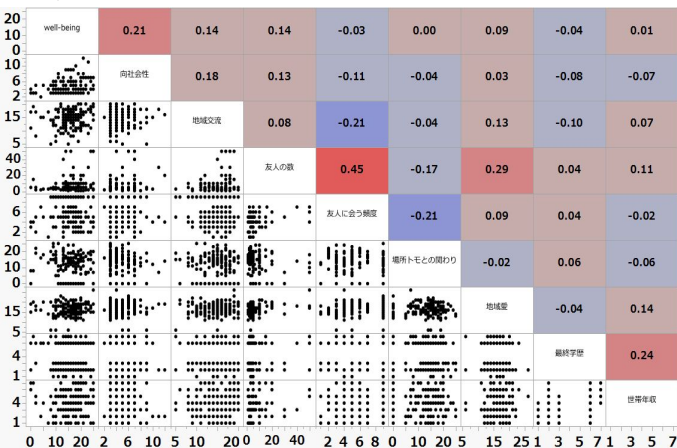
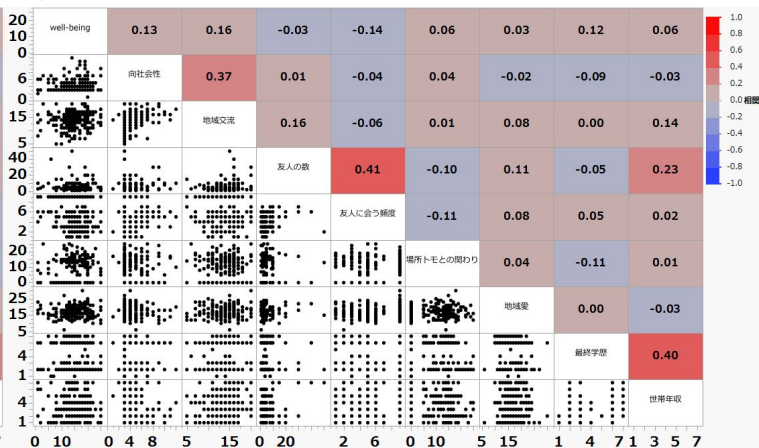


表2:非飼育者



well-beingに関しては、イヌ飼育者では**向社会性**が最も強い**正の相関**を示し、**最終学歴**が最も強い**負の相関**を示した。一方、非飼育者では**地域交流**が最も強い**正の相関**を示し、**友人に会う頻度**が最も強い**負の相関**を示した。
また全体の結果として、イヌ飼育者では**友人の数**と**会う頻度**、友人の数と地域愛、最終学歴と世帯年収は強い**正の相関**を示した。一方、友人に会う頻度と地域交流、友人に会う頻度と場所トモとの関わりは強い**負の相関**を示した。非飼育者では、向社会性と地域交流、**友人の数**と**会う頻度**、友人の数と世帯年収、最終学歴と世帯年収は強い**正の相関**を示した。

これから

本研究では、イヌ飼育者と非飼育者それぞれにおいて他者との関わりや利他的行動を調査することで、地域社会への繋がりが方に違いがあり、well-beingへ影響する項目も異なることが分かった。また、今回は相関関係の分析にとどまったため、今後は因果関係の解明にも取り組んでいきたいと考えている。